

資金収支計算書は、運営のための手許資金の状況を知るためには大切な計算書類です。では資金収支計算書から、どのような情報を知ることができるのでしょうか。

資金収支計算書の様式を見てみましょう。表1は全体の形式だけを簡略化して示したものです。

事業活動による収支	事業活動収入計(1)
	事業活動支出計(2)
	事業活動資金収支差額(3)=(1)-(2)
施設整備等による収支	施設整備等収入計(4)
	施設整備等支出計(5)
	施設整備等資金収支差額(6)=(4)-(5)
その他の活動による収支	その他の活動収入計(7)
	その他の活動支出計(8)
	その他の活動資金収支差額(9)=(7)-(8)
予備費(10)	
当期資金収支差額合計(11)=(3)+(6)+(9)-(10)	
前期末支払資金残高(12)	
当期末支払資金残高(11)+(12)	

資金収支計算書は収支の性格によって全体を「事業活動による収支」「施設整備等による収支」「その他の活動による収支」の3つに区分し、それぞれの収支内容を示した後に、3つの収支差額を合計して示します。これは、その年度の収支内容がどのような要因で生じたかを明らかにするためです。

紙幅の都合でここでは詳細をお示しすることはできませんが、よろしければご自身の施設の決算書の資金収支計算書をご覧ください。「事業活動による収支」には施設型給付費収入、委託費収入、補助金事業収入などの施設運営から生ずる主な収入と、人件費支出、事業費支出、事務費支出などの運営に必要な支出が記載され、収支差額が計算されます。

また社会福祉法人における施設整備では、通常の運営内容とは異なる極めて大きな額が変動しますので、施設整備のための補助金収入や借入金返済の支出などは、日常の取引とは区分して「施設整備等による収支」に表示します。また「その他の活動による収支」には、過年度の決算の修正など、通常は発生しない特別な収支が表示されます。

そしてこれらの3つの区分の収支差額の合計として「当期資金収支差額合計(11)」が計算され、前期から繰り越された「前期末支払資金残高(12)」が加算さ

れて「当期末支払資金残高(11)+(12)」が計算されます。

このように、ほとんどの日常活動の額は「事業活動による収支」に集中して記載されます。ですから毎年の施設運営の収支状況を知るためには「事業活動による収支」の内容を知ることがとても重要で、この収支差額（事業活動資金収支差額(3)）がマイナスであれば、施設運営のための資金に余裕がないことを表します。

資金収支計算書では、事業活動収入計(1)に十分な収入があり、その収入で人件費支出や事業費支出などの事業活動支出計(2)が適正に賄われることで事業活動資金収支差額(3)に十分なプラスが確保される必要があります。そして、そのプラス分が施設整備等支出計(5)の中の設備資金借入金元金償還支出や固定資産取得支出に充てられている状況であれば、一定の健全性が確保されていると考えてよいでしょう。

逆に、資金に余裕がないと感じられる施設の場合、単に全体の赤字のみを捉えるのではなく、その原因がどこにあるのかを検証する必要があります。その際、事業活動資金収支差額(3)がマイナスであれば、人件費や事業費といった運営そのものに係る支出を見直す必要があります。

計算書類は、保育の質を向上、確保するためのさまざまな情報を提供してくれます。それらの情報を読み取る方法を理解することも、とても大切なことです。

<まとめ>

- ① 資金収支計算書は
  - ・事業活動による収支
  - ・施設整備等による収支
  - ・その他の活動による収支
 の3つに区分される
- ② 施設運営に係る資金状況を見るには事業活動資金収支差額が重要である